

Trainers' Effective Skills And Technics 教育力向上講座

■ 講座の概要

ファシリテーターの力量アップをトレーニングするための手法にどんなものがあるか、「目標」「学習」「バリア」「価値観」の四つについて検討する四つのセッション。

■ ねらい

トレーナーとしてのスキルと技法を実践し、蓄積していく。

■ 2日間の構造

第一日目 (11/19)	第二日目(11/20)
セッション1 共通基盤づくり ・スキル指導 ・コンテンツ教科指導	セッション4 バリアは何? ・いまの世界の危機感 ・変化をはばむもの
セッション2 SDGs, ESD って何 ・国際社会の持続可能性の目標 ・出発点	セッション5 価値観とビジョン ・アクティブホープ四つのステップ
セッション3 学習の本質 ・わたしの学び ・なぜ参加型?	セッション6 ふりかえりと個人的行動計画

■ 参考文献／使用テキスト

- アクティブ・ホープ、ジョアンナ・メーシー+クリス・ジョンストン、春秋社、2015
<http://ericweblog.exblog.jp/21763983/>
- 互いにケアすることを学ぶ：教育と慈悲の心、Learning to Care: Education and Compassion、John Fien
15 May 2003、<http://ericweblog.exblog.jp/18988618/>
- 関連するレッスンバンク

0-H

フューチャーサーチ会議報告書

様々なセクターの人々が利害を越えて取り組む未来の行動計画づくり。

LB14-6	走向未来—ともに実現したい未来 に向けて	ERIC のこれまでの指導者養成事業のふりかえり分析と年度 の提案「鍵となる方針」にもとづいた行動計画。指導 養成事業推進のご参考に。
LB19-13	教育の創考未来	教育を千年の単位で見直されなければ、近代を超える ものは作れない。「千年続いてきたもの」を探すことを 出発点として、望ましい未来と教育のあり方を考えるプ ログラム。
LB18-19	教育改革のロードマップを創ろう!	先進国のほとんどは、未来は教育にかかっていると、 真剣な取り組みを始めています。「No Child Left Behind」では世界の教育との比較を試みました。このレ ッスンバンクでは、教育改革のロードマップはどのよう に描くことができるのかを考えます。
LB18-21	コミュニティ・ビジョン	コミュニティ・ビジョンは、市民一人ひとりが十分に知識 を得て、どのような社会でありたいかというビジョン持っ て社会的参加することで、よりよい未来づくりを目指す 方法論です。コミュニティー一人ひとりの成長を通したコ ミュニティ育てにご活用ください。
LB20-2	2050 年人権の未来	北九州の二日間の人権研修で、「未来学」の手法を取 り入れて「人権尊重社会」の未来像を探り、そこに向け て自分ができるプチプロジェクトを計画実施評価した。

その他、レッスンバンクに「未来を築く」アクティビティや
プログラムが紹介されています。

- 『ワールド・スタディーズ』ERIC, 1991 第7章 明日の
世界、p.144 「教育のありかたは、すべて未来をどう
とらえるか、から始まる。また、何の未来像も生み出さ
ない教育はありえない。それゆえ、すべて教育は未来の
ための準備と言える。わたしたち教師は、どのような未
来に備えているかを理解していなければ、こどもたちに
壊滅的な被害を与えかねない。未来の姿が、学ぶ意欲に
どれほど強い心理的影響を及ぼすかを理解しなければ、
教える技術だけがいかに飛躍的に向上したところで、学
校や大学をあるべき形にしていくことはできない。」A.
トフラー『明日のために学ぶ -教育における未来の役
割』より
- 『テーマワーク』ERIC, 1994 第4章 変化、p.91 「つ
くりだす未来/あたえられる未来」

■プログラムの流れ

- ESD の目標、価値観とコンピテンシー、SDGs など国際社会が合意している「こうありたい未来」を共有する。
- ESD が依拠している学びのありかたを『学習の本質』から探る。学校の手だてと第三者の手だてをストックとフローとして組み合わせる



- ESD 推進にとって、バリア、阻害要因になっていることは何かを分析する。
- 「こうありたい未来」に向けた行動の三つの次元と、つながりを取り戻すための四つの視点のスパイラルを取り入れる。

■プログラムのすすめ方

セッション1 共通基盤づくり

【セッションの要素】

- 自己紹介
- 話し合いのルールづくり
- 「スキルの習得」について
- 「コンテンツ教科の教え方」について

10:30-開始

1. 100 均の「透明タイル」を使って作品づくり
2. 作品づくりをふりかえる=学んだことはなんだろう？

3. スキル指導の在り方に、学んだことを活かす。→全体共有

- とりあえず、とりかかる。
- 目的やテーマを明確にする。
- やってわくわくする。
- 自信につなげる。
- 次につなげる。
- できるとあきらむ

4. 「できる」とは何かを検討する。→全体共有・分析と解釈

- 「やれる」はスキルだが、「できる」は達成や評価の言葉
- 「できたね」という評価的表現はしない。「やったね」という共感の言葉
-

5. スキル指導に活かしたいこと

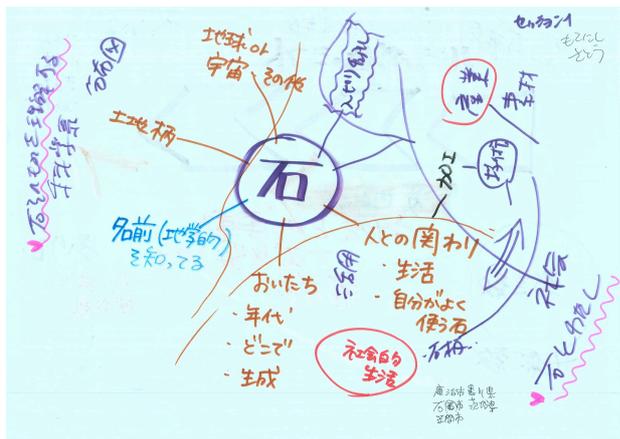
- 子どもにスキルが身に付いていくことを強化する声かけなどのために、観察力が重要。
- 『幼児期からの環境体験』では、「体験を評価する」視点として「言葉・態度姿勢・行動」をあげている。
- 障がい児に対するデイケアの支援者に対して、「自動販売機でジュースを買う」ことの手順書を書いてもらう。このアルゴリズムを確認することで、要支援者が手順のどの段階で課題を抱えているのかの観察の視点が得られる。

6. ジャーナルづくり・自己紹介・話し合いの心がけ

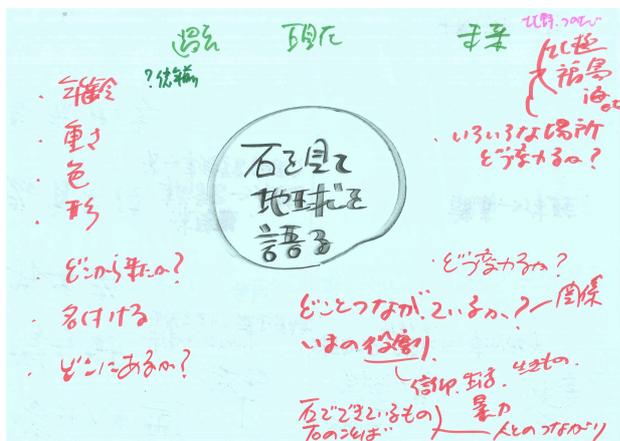
7. コンテンツ教科の構造を考える=「石を見て、地球を語る」には？[新聞記事「地学オリンピック」]



【例1】



【例2】



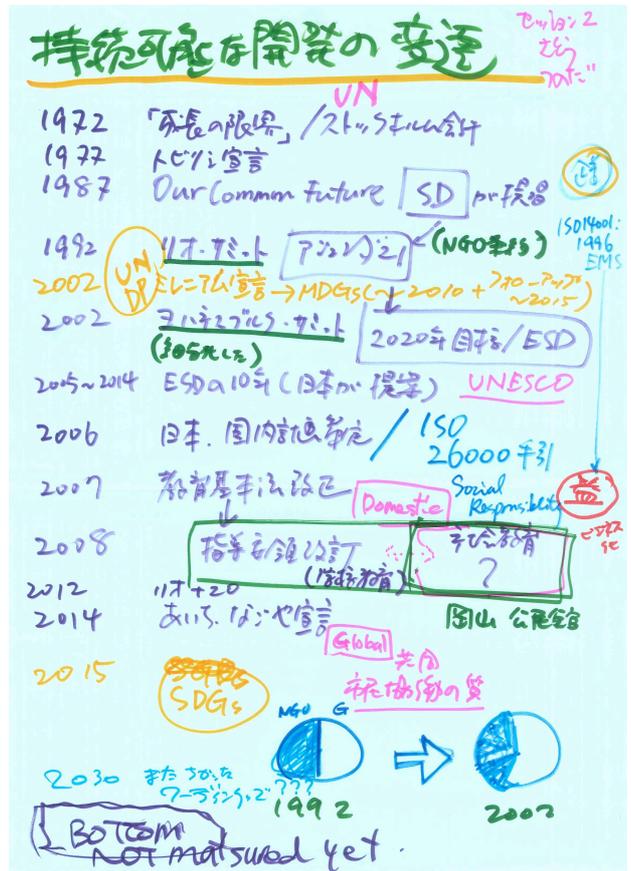
- 実際の石はなくても、わたしたちの体験の中の「石」が「石」というキーワードによって喚起されてくる

- こんな風に学びたかった。
 - 歴史という時間の流れと空間的な広がりから学べる
8. 系統的知識を参加型で教える力についてまとめる

セッション2 SDGs, ESD って何?

14:00

1. 出発点「知っていること・知りたいこと」
2. 共有したい目標
3. 共有のためのHow をデザインする
4. ふりかえり



「なぜ」を問うのがよいのではないかな。
なぜSDなのか、なぜ参加型なのか、など。

- 気候変動、シロクマくんが危ないなど、遠いし、たくさんある。いつもある。
- 昔に比べてショックがない。

セッション3 学びの本質 ベスト10

16:35-

1. FHBp.6 「パラダイム・シフト」納得度と疑問点[個人作業10']

→知見のことばをパラフレイズ・わたしのことばで表現すると・・・

→学校のパラダイム・シフトを点検する

→第三者ができること

学校でできること¹

- 既存の教科内での実践 教科書を題材に、実物を持ち込んで、ディスカッションもまじえ、実践する。
- 新科目実践 学校設定科目を活かす
- 総合学習の時間 外国人ゲストは、高校生を対象にする場合、「お国紹介」にとどまらないように! しっかり教師の側が講師と打ち合わせをする。
- クラス経営・ホームルーム活動
- 生徒会活動
- 部活動・クラブにおける実践
- 海外研修旅行
- 国際交流・国際理解行事
- 留学
- イベント・コンクールへの参加
- 学校行事・学校全体での取り組み

2. ストックとフローのベスト・デザイン

セッション4 バリアは何か?

9:00-

1. 昨日のふりかえり[個人作業→全体作業]

2. 今日の予定と残された課題

3. 進化・深化を阻むものは何? 分析を深める=発見するために、テーマを絞り、Howを選ぶ。→全体共有

4. 点検

5. 教育における「型から入る」vs「アクティブ・ラーニング」の併存の未来

6. ノートテイキング

いまの世界の問題に気づかないこと。なぜ気づかないのか。7つの傾向。P.82-88

1. そんなに危険だと思わない。
2. この問題を解決するのはわたしの役割ではない。
3. 目立ちたくない。
4. この情報は私のビジネスや政治的立場に不利である。
5. あまりにも気持ちが動揺するので考えたくない。
6. 危険であるのはわかるが、身がすくんでしまっただうすればいいかわからない。
7. どうせ何の効果もないのだから、何をしても無駄なことだ。

これまで通りというストーリーから生じるものと、危機の認識から生じるものと。

慈悲の心という「痛みを共に感じる」ことは仏教では強さの証明。91

3 Active Hope ⊕

最大の危険: ハーツ&マインドが死んで逝く

■抑圧の要因

心理的な抑圧要因

- Fear of Pain 痛みに対する恐れ
- Fear of Despair 絶望に対する恐れ
- Fear of appearing morbid 病的に見えることに対する恐れ
- Fear of Guilt 原罪の恐れ
- Distrust of Our Own Intelligence 自分たち自身の知性に対する不信
- Fear of being unpatriotic 非愛国的であるという恐れ
- Fear of appearing weak and emotional 弱くて感情的な存在に見られる恐れ
- Belief in the separate self 分割された自己という信念 View of Self as Separate
- Fear of Powerlessness 無力感への恐れ
- Other Spiritual Traps その他の精神性の罠
- Fear of Not Fitting In 居場所がないという恐れ
- Fear of Distressing Loved Ones 愛する者を悲しませる恐れ
- Hijacked Attention 関心のハイジャック
- Fear of Knowing and Speaking 知ること・語ることに恐れ

社会経済的な抑圧要因

- The mass media マスメディア
- Job and Time Pressures 職業と時間のプレッシャー
- Social Violence 社会的暴力

■抑圧の結果起こること

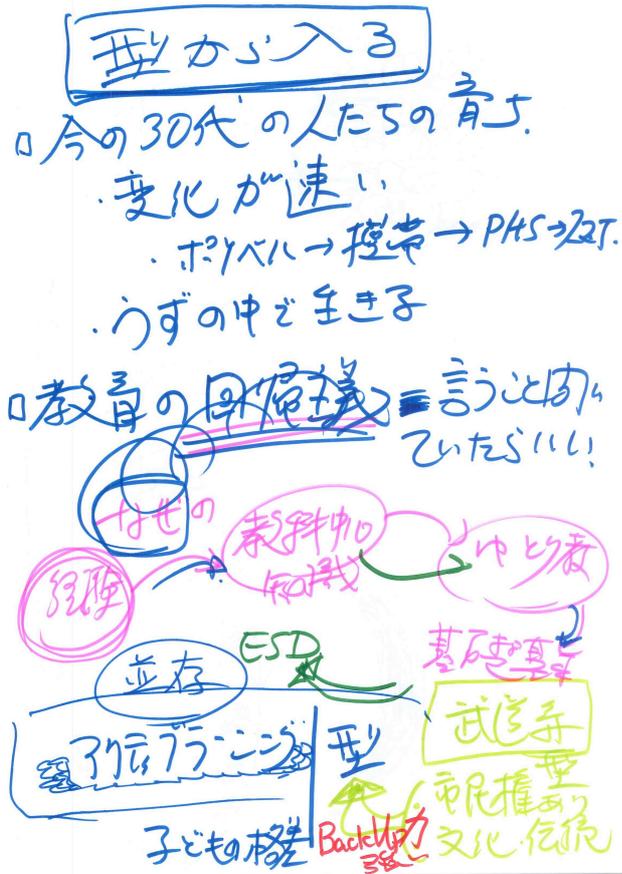
- Fragmentation and alienation 分断と孤立化
- Displacement activities 場所の剥奪
- Blaming and scapegoating 批判する、スケープゴートをたてる
- Political passivity 政治的受動性
- Avoidance of painful information 痛みのある情報を避ける
- Diminished intellectual performance 知性的なことを行わない
- Burnout 燃え尽きる
- Sense of powerlessness 無力感

Impeded 知性・無意識・自己保存・エロス・共感・想像力・フィードバック

Coming Back To Life, 1998&2014 より

【分析1】

「型から入る」



型から入る 教育

(+)	(-)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 統制) ETC) やすい ・ 言うとかいさせ やすい ・ 型が心で定まる ・ 考えが ・ 安心感「でき」という効力感 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「なぜ」を考へな理解して行動の ・ かわりや子 ・ パターンの習熟 ・ 応用がきかぬ ・ 型以外のものが育つ ・ 型が子と考へ ・ 「やった」ばかり

- ・ 小学校一年生に「気をつけ」などを指導。「いまやっておかないと、後で苦労する」
- ・ 三年、四年になってから「自分で考える」「主体的に調べる」などを求めても、「子どもができない」と、子どもを理由にする。本当か？

Active Learning = 型から入る

- ・ グループ討議・ワーク
- ・ 問題解決学習
- ・ 発見学習
- ・ 体験学習

- おもしろくない 子どもの(型)が
- ワクワクしない 「子どもが
- 参加できない
- 意見が出ない 言い訳はして

- ・ オランダのイエナ・プランの学校のように、「時間割」や「チャイム」という画一的なすすめ方を学校からなくしてしまえばどうだろうか？
- ・ 学習の見通しを立てる事は大切。それは障がい児も同じ。

【分析2】

進化をはばむもの

進化を阻むもの

□ 子孫の **特権**

□ 子孫の **学習**
 字とよりよ **特権**
 生きよ

□ 向達、た報西州が子に
 している? **フィードバック**

□ 社会、人材向達、た報
 西州が社会の制度化
 されているのか?

進化を阻むものは何?

- みえ
- 取心
- 恐怖
- あきらめ
- その多大勢に押し流される、負ける
- 安定と安心を望む(保守)

【分析3】

パワーと特権を分析する

「向達、た報西州」

□ 誰が報西州を出せるの?

Physical Power をもてて
 はどんな報西州を出せる?

支配 - **依存** - **恐怖が解放あり**
 大丈夫 安心

- 中国 海 - 自衛隊
- **軍事力** 物理的力

(たご子) (たごりゅう)

からだ感覚 = 心理的直感

複合的な特権にPPがある

向達、た報西州の特権

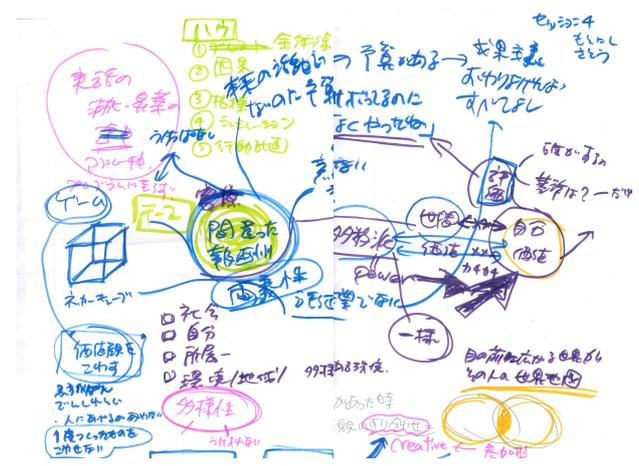
□ 生きる → 学習 → 知識 → 向達、た feedback

□ 生きていく → 真実精神 → 人の行動を強化

□ 退く → 学習 → 他人の行動を強化

□ 「このやり方」でやる → 他人の行動を評価する

□ このやり方の特権を
 認め続ける。仲間
 変化する。仲間
 とうまくせよ



こういう人でも ……エライ人

- **力** の側
 ・セクハラ・パワハラ
- 男の社会で生き子女の大きさ
- 大人のいじめ

こういう人の生きのびる策略

こうスマートも利用してきた

力の誇示

• 人を支配し、コントロール
 エスカレーター
 • 怖い、怖い、怖い、怖い
 地域

セッション5 価値観とビジョン

12:30



1. カットウする価値観[全体ブレスト]

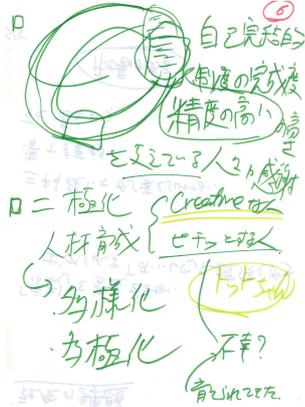
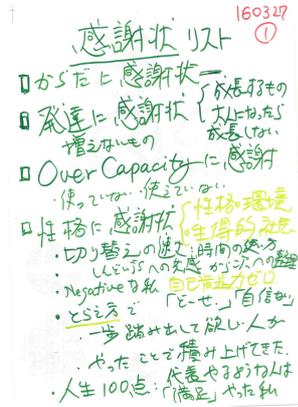
2. こういう人でも・・・エライ人

3. 感謝状リスト

自分に感謝

他人に感謝

地球に感謝

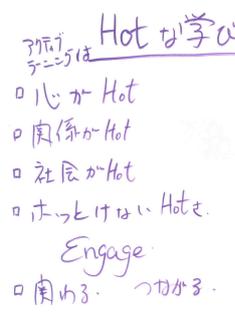


- わたしはわたし。強引に My Way
- 目標が遠い、ここでよしと思ったことがない。常に Next
- 時代に感謝
- 生きていることの根源的力

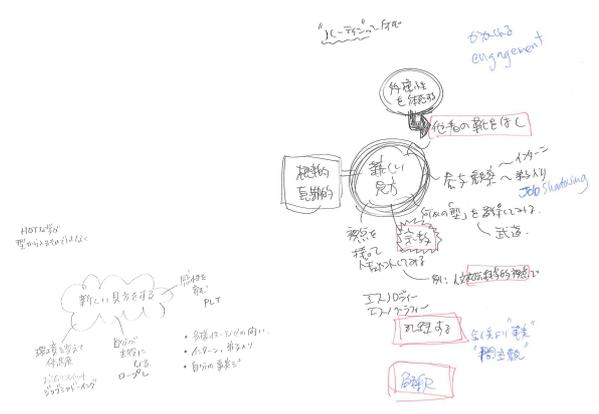
4. 痛みを受けとめる

- 外国の子どもが「国旗」を描き、尊敬するのは親と語る姿。日本の子どもの自尊感情のなさ。
- ミクロとマクロの距離が縮んでいる。

5. 新しい見方



ほっとがなくなると感情が劣化する。情報が多くなると狭くなる。



新しい見方をする

- 反対側問題
- 異年齢人の声と自分の感覚の違いを知る
- 写真を撮る角度
- 多様な視点の問題行動の意味を知る

- ドキュメントする、記録する→解釈する
- ドキュメント「さとにきたらええやん」
<http://eiga.com/movie/84560/video/>
- お母さんをとっかえる二週間=感謝、前提としているあたりまえに気づく
- ジョブシャドウイング=自分のなりたいたい職業についている人の影となって付き従ってみる。かつての書生、かばん持ち、丁稚奉公、弟子などとの違い？
- 自分が主役になる

セッション 6 行動計画

14:45

1. 前へすすむ
2. 残された課題
 - 物理的パワー
 - いまの世界の危機に気づかない
3. 二日間のふりかえり
4. 修了証

■TEST を構成する

TEST、Trainers' Effective Skills & Technics という名前にしました。教育力向上講座はそのままですが、英語を変えることで、研修の焦点の変化を明示できればと思っています。

いまや ESD の推進は、ESD を実践するファシリテーターを育てるトレーナーにかかっているのではないかと思います。文科省が言う「学内メンター」のような立場にある人々や、教育委員会、指導主事のような人々がアクティブ・ラーニングの実践者として、免許更新講習や教員養成段階で、教育学にかかわる内容を教えることができる力を身につけること。

ということで、今回は四つの視点「目標」「学び」「バリア」「価値観」について、アクティブ・ラーニングで学びあうこととしました。

この四つの視点というのは、起承転結の四行文章的に整理すると次のような構成から考えました。

1. 「こうなりたい未来」

ESD や持続可能な開発のための国際的な合意目標などが存在する。それらの内容について、知っていますか？

2. 「学習の本質」

さらに、ESD 持続可能な開発のための教育では、どのような学習が効果的な学習かということについて、例えばアクティブ・ラーニング、例えばサービス・ラーニング、

例えば構成主義、例えば協同学習などの方法があることが共有されています。

3. 「バリア・変化を阻むもの」

持続可能な開発のための教育は、「わたしたちの社会はこのままでは続かない。だからわたしたちは変わらなければならない。」というメッセージを含んだ概念です。もし、いまのままを再生産するのでよければ、わざわざ「教育」について語らなくても、教育は再生産のために行われているのですから。

にもかかわらず、「変わらなければならない」ということに対して抵抗があることも事実です。個人的なためらいや疑問から社会的な制度的強固さまで、バリアはさまざまなレベルで存在します。

表面的には変化しているようでも、実は根本的な価値観は変えないまま、変化を取り込んでしまうことは、これまでも環境保全の分野でも、人権の分野でも起こっているのではないのでしょうか。

根本的な、本質的な変化のバリア、阻害要因になっているものは何か、どう越えればいいのかを考えます。

4. 「価値観とビジョン」

こうありたい未来に向けて行動すること、それをジョアンナ・メイシーさんは「アクティブ・ホープ」と呼んでいます。アクティブ・ホープの核心となるものは「感謝」と「慈悲」だと思います。ジョアンナ・メイシーさんたちがやっている活動は「つながりを取り戻す Work that Reconnect」と名付けられており、わたしたちと地球、いのちをつなぎ直すことですが、感謝は、

まさしくつながりの再確認になります。そして、地球とのつながりを知る時、わたしたちはさまざまな他者の「痛み」にも触れないわけにはいきません。仏教学者であるメイシーさんが説く「慈悲心」とは、「他者の痛みに対して心を開く」ことであるのです。大慈大悲は仏の技ですが、わたしたちにも慈悲心はあるのです。他者の痛みにも心を開きすのではなく、受けとめること。そこからつながり直しが始まるのです。

自分自身の「こうありたい未来」につらなる価値観を再度確認するセッションです。

■セッションの「経験学習」的構成

それぞれのセッションで伝えたいこと、共有したい内容を、以下のような経験学習の四段階のアプローチで学びます。体験する・ふりかえる・解釈する・つなげる

1. 体験を掘り起こす

いまの社会に生きている以上、「こうなりたい未来」についての知識やイメージは誰しももっていることでしょう。

「出発点」のような体験を掘り起こす活動、あるいは何かきっかけになるような体験など、「1. 実物 2. 実地 3. 実話 4. 実感 5. 実態 6. 実存」のいずれかを準備しましょう。わたしたちの中にあるもの、それが「実」ですし、他の「実」に触れることで、触発されて意識されてくるものもあります。

2. ふりかえる

ブレインストーミング的に出したもの、出てきたものから気づいたこと、感じたこと、学んだことをふりかえます。

3. 解釈する

自分たちの経験から学んだことを解釈するための「点検の視点」を持つことで、「学問」などの先行知見と自分たちをつなぐことができます。学問は真空からその知見をつむぎだしているわけではありません。わたしたちの体験や世界から、学問の結果は導きだされているのです。わたしたちがすでに直感的に知っていることや実践していることが、いわゆる科学的に整理されて、提示されているものが学問です。

4. つなげる

学んだこと、再整理したことを、ふたたび、現実にはめて考えます。よりよく構成された世界観によって、現実の世界を読み解き、よりよく生きるための行動は何かを考えることができるようになります。

	ESD	学び	バリア	価値観
体験				
省察				
解釈・点検				
応用				

このような視点で四つのセッションをふりかえることで、トレーナーとして提示できる「実」や「点検の視点」の質と多様性を高めることができるでしょう。

■ 経験を評価する

■ スキル指導とコンテンツ教科指導を比較する